The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大正期の少女雑誌におけるフランス小説の受容 : グザヴィエ・ド・メーストル原作、野村壽恵子訳『シベリアの少女』をめぐって
Author(s)	渡辺, 貴規子
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2024, 1, p. 159-181
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94803
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大正期の少女雑誌におけるフランス小説の受容

――グザヴィエ・ド・メーストル原作、野村壽恵子訳『シベリアの少女』をめぐって

渡 辺　貴規子

キーワード
フランス文学、少女小説、少女雑誌、翻訳、『シベリアの少女』

明治期、大正期の日本の児童雑誌において多くの外国文学の作品が翻訳・翻案され、児童読者に紹介されたことはよく知られている。フランスの文学作品についても例外ではなく、たとえば『少年世界』（1895（明治 28）年創刊）におけるジュール・ヴェルヌ（Jules Verne, 1828-1905）の『十五少年漂流記』（原題は『二年間の休暇』*Deux ans de vacances*, 1888）の紹介[1)]、鈴木三重吉が主宰した児童雑誌『赤い鳥』（1918（大正 7）年創刊）における多くのフランスの小説の翻訳・翻案の掲載は有名である[2)]。しかしその一方で、明治期、大正期に初めて翻訳され、その後も長年にわたり何度も児童に向けて紹介されたにもかかわらず、現在では忘れられてしまった作品もある。

本稿で扱うグザヴィエ・ド・メーストル（Xavier de Maistre, 1763-1852）原作、『シベリアの少女』（*La Jeune Sibérienne*, 1825）も、そうした作品の一つである。この作品は、日本における初めての全訳が、野村壽恵子訳「翻訳少女小説　シベリアの少女」として時事新報社発行の少女雑誌『少女』第 37 号～第 46 号（1916（大正 5）年 1 月から 10 月）の 10 号にわたり連載され、同年 12 月に大倉書店から単行本が上梓された。この『シベリアの少女』は、大正初期の少女雑誌において、原典に比較的忠実な形で翻訳され、「少女小説」として紹介

※本稿における翻訳と原典の比較には次の版を用いた。*La Jeune Sibérienne*, (1825), dans *Œuvres de Xavier de Maistre* ; Paris, Flammarion, s.d. (vers 1920), p.233-311.（以下、この作品を指す時には、*JS* という略号を用いる。）野村壽恵子訳、『シベリアの少女』大倉書店、1916 年。本稿における引用の欧文文献の訳は、すべて拙訳である。日本語文献を引用する際には、可能な限り旧字体を新字体に書き改め、ルビは省略した。

1）森田思軒「冒険奇談 十五少年」『少年世界』第 2 巻第 5 号～第 2 巻第 19 号、1896 年 3 月～ 10 月。

2）佐藤宗子「『赤い鳥』の出発－演出者 鈴木三重吉」「『赤い鳥』のフランス物」『「家なき子」の旅』、平凡社、1987 年、13-131, 368-369 頁。

された、数少ないフランスの長編小説の一つでもある[3)]。

主人公の少女、プラスコヴィ・ロプロフ（Prascovie Lopouloff）が、冤罪でシベリアに流刑となった父親のために、サンクトペテルブルクまで一人で旅をし、皇帝に直訴して父親に対する恩赦を得るまでを描くこの小説の、フランス、日本での受容の経緯を調査すると、現在の日本では忘れられた作品ながら、19 世紀から 20 世紀初頭のフランスでかなり流布し、日本でも 1970 年代までは世界名作、児童用の伝記として読まれたことも判明した[4)]。また日本では、野村壽恵子訳が出版される以前、すなわち具体的には明治 20 年代から明治末にかけてプラスコヴィの逸話は単行本、婦人雑誌、少女雑誌において孝女譚としてすでに紹介されており、大正期にその孝女譚をより多くの少女読者に紹介しようと、メーストルの小説の全訳が望まれ、野村訳が生まれたことも判明した[5)]。

このようなフランス、日本における興味深い受容の経緯があるにも関わらず、日本ではこの小説に関する先行研究はまったくなく、フランスをはじめとするヨーロッパ諸国での『シベリアの少女』に関する先行研究もきわめて少ない[6)]。本稿では、プラスコヴィの逸話の紹介、メーストルの小説『シベリアの少女』の受容の歴史とともに、日本初の全訳である、野村壽恵子訳『シベリアの少女』の翻訳の様相とそこに見られる少女像、少女読者への配慮についても検討したい。

本稿の構成は以下の通りである。まず第 1 章では、小説の題材となった 19 世紀初頭の実話である、ロシアの少女プラスコヴィ・ロプロフの逸話について紹介する。第 2 章では、フランスでの逸話の紹介と受容の状況について、とくにプラスコヴィの逸話が児童向けの訓話として流布するまでを先行研究に拠りつつたどる。第 3 章では、日本での受容について、明治時代半ばから 1970 年代までを概観する。第 4 章では、日本初の全訳である野村壽恵子訳『シベリアの少女』が翻訳された経緯を紹介する。第 5 章では、野村壽恵子訳の翻訳の様相につ

3）現在までの筆者の調査では、大正初期の少女雑誌において、「少女小説」として紹介された、フランスの長編小説としてはエクトール・マロ原作、五来素川訳『雛燕』（『新少女』第 3 巻 1 号～第 3 巻 9 号連載、1917 年 1 月～ 9 月）がある。渡辺貴規子「大正初期における翻訳少女小説の一様相：エクトール・マロ原作『家なき娘』の初の邦訳をめぐって」『言語文化の比較と交流』10、2023 年、34-44 頁。

4）本稿第 3 章、本論文末表 2 参照。

5）本稿第 4 章参照。

6）現代の研究成果として次の 3 論文を参照した。Sarah Al-Matary,《Une Sibérie à l'usage des familles : la fonction édifiante de la figure de Prascovie Lopouloff en France (1806-1900)》, Sarga Moussa et Alexandre Stroev, *L'Invention de la Sibérie par les voyageurs et écrivains français (XVIIIe-XIXe siècles),* Institut d'Études Slaves, 2014, 179-187 ; Charlotte Krauss,《De Prascovie Loupalova à Élisabeth Potoska. La fortune d'une matière sibérienne, du roman français à l'opéra italien》, *Revue de littérature comparée* n° 335, 2010/3, p.273-290 ; Nathalie Dolbec,《Opération d'ancrage et d'affection dans les descriptions d' Élisabeth ou les Exilés de Sibérie de Mme Cottin et de la Jeune Sibérienne de Xavier de Maistre》, *Itinéraire du XIXe siècle,* Centre d' Études romantiques, Joseph Sablé, 1996, p.43-56.

いて、底本を特定し、章構成を検討する。第6章では、実際の翻訳文について原典との比較の中で検討する。そして翻訳に見受けられる少女読者への教育的配慮、主人公の少女像について考察する。第7章でまとめを付す。

1. プラスコヴィ・ロプロフの逸話について

本章ではまず、小説の題材となったプラスコヴィの逸話の内容を紹介したい。『シベリアの少女』の題材となったのは実話であり、この小説の主人公、プラスコヴィ・ロプロフ（Prascovie Lopouloff[7], 1784-1809）も18世紀末から19世紀初頭に帝政ロシアに生きた実在の人物である。プラスコヴィは、冤罪で政治犯としてチュメニ州イシム近郊の村に流刑となっていた、ロプロフ大尉の一人娘であった。十代半ばのある日、父親の出自、帝都サンクトペテルブルクでのかつての生活、父親が政治犯として貴族の称号を剥奪され、シベリア地方へと流刑となり、それが冤罪によるものであったことを知った。プラスコヴィは天啓により、皇帝に父親の恩赦を直訴することを思いついたと言われ、イシムからサンクトペテルブルクまで、一人で数千キロの距離を、徒歩で旅をすることを決意した。数年の準備期間を経て、1803年9月から一年余り、徒歩で旅をし、目的地のサンクトペテルブルクに到着した。サンクトペテルブルクに到着したものの、宮殿に出入りするための何のつてもない少女は、道中に立ち寄ったニジニ・ノヴゴロドの女子修道院からの紹介で知り合った貴族の婦人たち、慈善家の助けも得て、1805年初頭に皇帝アレクサンドル1世夫妻に謁見し、父親に恩赦を与えてほしいと直訴することに成功し、皇帝はプラスコヴィの父親の恩赦を決定した。プラスコヴィは目的を遂げた後、家族と別れ、道中に世話になったニジニ・ノヴゴロドの女子修道院に隠棲、そこでわずか数年後、1809年に病死したとされる。

フランスと日本で語り継がれるプラスコヴィの旅は、わずかな金銭しか持たず、過酷を極める一人旅であった。寒さ、飢え、疲労に何度もさいなまれつつ、出会った人々や軍隊の助けを得て、目的地へ到着した。プラスコヴィの道中の苦労話として、中でもとくに有名なのは、盗賊の夫婦の家に泊まった際の以下の挿話である。当初、盗賊夫婦は盗みを目的としてプラスコヴィを家に招き、食事と寝る場所を提供した。そして寝ている間に彼女の全財産を奪おうと企んだのであるが、食事中に彼女の身の上、旅の動機を聞いて夫婦は改心した。そして彼女の所持品を盗むのではなく、むしろ自らの家にあったわずかな金をプラスコヴィに旅の資金として持たせた。プラスコヴィのサンクトペテルブルクに行きたいという強い信念、勇気、孝心が盗賊をも改心させるという点が印象に残る道徳的な挿話である。

7）Prascovie Lopouloff はフランス語表記である。アルファベット表記では、ほかに Praskovia Lupolova というロシア語の音韻を尊重したものもある。メーストルは小説『シベリアの少女』の中で、フランス語表記での少女の実名を主人公の名として採用した。

また、プラスコヴィが父親の恩赦決定という旅の目的を遂げた後、家族とともに暮らすことなく女子修道院に隠棲し、そのわずか数年後に病気で逝去したというはかない最期も、この実話のひとつの特徴であり、プラスコヴィの逸話を題材とした物語の読者は、彼女への同情をさらに強くしたと考えられる。後述するように、フランスの児童向けの訓話の中でプラスコヴィは、使命を果たした後に夭折したジャンヌ・ダルクとも並び語られるようにもなるのである。

2. フランスでの受容の状況：プラスコヴィの逸話が児童向けの訓話となるまで

フランスでは、プラスコヴィの逸話はまず、フランスのソフィー・リストー・コタン（通称コタン夫人、Sophie Ristaud Cottin, dite Madame de Cottin, 1770-1807）により小説化され、演劇作品として親しまれたのち、グザヴィエ・ド・メーストルによって再度小説の題材とされた。そしてメーストルの作品を基として、児童向けの教訓を含む、訓話として紹介されるようになっていったと考えられる。

本論文末に提示した表１には、プラスコヴィの逸話をもとにしたフランスおける作品群を示したので参照されたい。ただし、この表には一部、フランスの小説を基にしたイタリアの演劇作品も含まれる。

プラスコヴィの逸話をいち早く小説化したのは、1806 年、コタン夫人の『エリザベス、あるいはシベリアの流刑者たち』（*Élisabeth ou les Exilés de Sibérie*, 1806）であった。この小説の反響の大きさを示すのは、同年、すでに２つの演劇がこの小説をもとにパリで立て続けに上演されたことである。その後、イタリアでも少なくとも２種類の喜劇が生まれた。1818 年には人気のメロドラマ作家、ピクセレクール（René-Charles Guilbert de Pixérécourt, 1773-1844）により戯曲化され、さらに物語はフランスの人々に知られることとなった。

コタン夫人の小説の特徴は、創作的要素を盛り込み、実話よりも波乱万丈の物語を作り上げた点である。中でも主人公が、父親のかつての部下であるスモロフ将校に、危険な旅や皇帝との謁見においてつねに助けられ、結末において彼に求婚され、結婚するという展開は、まったく実話に沿ったものではない。また、コタン夫人の小説では主人公の旅がサンクトペテルブルクでなく、モスクワで目的を遂げる結末となっており、少女の旅は短くなった[8)]。

主人公の旅の苦労に加え、恋愛小説としての要素、登場人物たちの起伏に富んだ感情のやり取りが見られるコタン夫人の小説は、メロドラマや戯曲へ翻案には適していたと考えられる。しかし、大正期の日本の少女雑誌に「翻訳少女小説 シベリアの少女」として掲載され

---

8) Charlotte Krauss,《De Prascovie Loupalova à Élisabeth Potoska. La fortune d'une matière sibérienne, du roman français à l'opéra italien》, *Revue de littérature comparée* n° 335, 2010/3, p.273-290

た作品の底本となった、グザヴィエ・ド・メーストルの作品はコタン夫人の作品とはかなり性質の異なるものであり、後述するように、メーストルは『エリザベス、あるいはシベリアの流刑者たち』に対し批判的な考えを持ちつつ、小説を執筆した。

グザヴィエ・ド・メーストルは、政治家・思想家・作家であるジョゼフ・ド・メーストル（Joseph Marie, comte de Maistre, 1753-1821）の弟として知られ、サヴォワに生まれ、軍人として生きる傍らで、文学作品を残した。兄の思想に共鳴し、1803 年にはロシアで軍務に就くために移住、以後ロシアに生活の拠点を構えた。1825 年刊行の『シベリアの少女』はコタン夫人の小説が大いに意識されつつ、それとは異なる傾向を持つ作品となった。つまり、メーストルはプラスコヴィ本人と面識があったとも言われ[9)]、あくまでも実話に基づく執筆に努めたとされる。筆調については、第三者の語り手による地の文が続き、直接話法の会話文も比較的少なく、淡々と物語が語られる。小説の冒頭においては、コタン夫人の小説が意識され、それとは性質の異なる物語が書かれたことが次のように明示される。

> パーヴェル 1 世の治世の終わり頃、徒歩でシベリアからサンクトペテルブルクまで向かい、父の恩赦を請うたという少女の勇気は当時とても評判となった。ある有名な作家（原注：コタン夫人の『エリザベス、あるいはシベリアの流刑者たち』）がこの少女を主人公にし、この興味深い旅を小説にしたほどである。けれども少女を知る人々は、父親に対する最も純粋な愛以外の情熱を決して持たない、支援も助言もなく、自らの心の中に最も健気な行動を考えつき、その行動を起こす力を見出したこの若く気高い乙女に、作者が恋愛の要素や小説的創意を加えたのを、よく思っていないようだった。彼女の冒険は、小説家が架空の登場人物のために思いつくような予想外の面白さはなくとも、脚色なしの事実そのものだけで充分に面白く、読者も読んでいて何らかの喜びを感じずにはいられないだろう。（*JS*, p.233）

このように、小説の冒頭では、「事実そのもの」を再現する努力をしたと述べられ、コタン夫人の作品との差異が主張されている。これは、作者であるメーストル自身の自負であると考えられると同時に、19 世紀の文壇における『シベリアの少女』に対する評価でもあった。たとえば、サント＝ブーヴは 1839 年に発表したメーストルの評伝において、『シベリアの少女』における堅実な語りを評価し、コタン夫人の小説を感傷的すぎると次のように評した。

> 『シベリアの少女』は本物の哀感、一貫した、深く根源的な、そして控えめな語調で

9）Alfred Berthier, *Xavier de Maistre: Étude biographique et littéraire,* Lyon, E. Vitte 1918, p.xviii

表現される哀感により、とりわけ魅力的である。その哀感には、節度ある作者が、涙越しになお見抜いてしまう人間の本質に対する、繊細であるが少しの皮肉を込めた観察が交錯している。(…) コタン夫人は、メーストル氏が簡潔に語った話を、『エリザベスあるいはシベリアの流刑者たち』という小説にしていた。彼女の作品では、夢見る感傷的な少女、湖畔の流刑者の娘が描かれている。少女には高貴で美しい恋人、青年スモロフがいる。少女は自らの旅の案内を恋人に頼みたかったのであるが、宣教師に案内される方がより適切だろうと言われる。結局、少女は恋人と結婚する。コタン夫人の作品では、実在した純真で敬虔で勇敢な少女プラスコヴィは、完全にコタン夫人の感傷の中に消えてしまった。[10)]

プラスコヴィの逸話が児童向けの訓話として発表され、プラスコヴィが児童の模範として認識されたのは、コタン夫人の作品の出版後ではなく、メーストルの『シベリアの少女』刊行後と思われる。というのも、本論文末の表 1 からも明らかなように、児童向けの作品が上梓されるようになるのが、1830 年代後半以降であるからである。1806 年から 19 世紀末にいたるまでの、プラスコヴィの逸話の流布の状況を調査・分析したサラ・アル＝マタリーによると、1830 年代から 1870 年代までの間に、プラスコヴィの逸話が児童向けの道徳読本などを介し、児童の模範として一般に浸透していった。その様相について、次のように分析された。

1830 年から 1900 年までの間に、多くのテクスト―児童用の挿し絵付きの読物、道徳の教科書―により、けなげなシベリアの少女の旅は一般に広まっていった。(…) カトリックと世俗の間の対立が激化する 1870 年代までに、フランスの報告、記事、文芸作品が、ヒロインの少女時代の偉業を想起させてきた。1837 年、ミシェル・マソン（Michel Masson）は、後に最も広く読まれる挿絵本となる『有名な子供たち』（*Les enfants célèbres*）にこの作品を掲載した。1858 年のディディエ版の扉絵は、この作品の宗教的な方向性を疑う余地なく示している。(…)（引用者註：「信心深い子ども」「親孝行な子ども[11)]」という）二重の意味での《enfant pieux》の模範としてのプラスコヴィ像は、

10) Charles-Augustin Sainte-Beuve,《Le comte Xavier de Maistre. 1839.》*Portraits contemporains,* Paris, Michèle Lévy, 1870, p.53–54. なお、サント＝ブーヴによるグザヴィエ・ド・メーストルの評伝には以下の全訳があり、本稿における引用の訳出に際しても参照した。サント＝ブーヴ「グザヴィエ・ド・メーストル伯爵略伝」（加藤一輝訳）、『部屋をめぐる旅 他二編』幻戯書房、2021 年、194–229 頁 .

11) 1874 年のエミール・リトレの辞書では、《PIEUX》の第三の語義に「子としての愛（孝行心）、不幸な人々に対する憐みの気持ちを大切にする（《Qui tient à un sentiment d'amour filiale, de compassion pour les malheureux》）」とある。Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, Tome 3, Paris, Hachette, 1874, p.1117.

コタン夫人、そしてメーストルのテクストに都合よく拠りながら、しっかりと形成されてきた。1842年、ジュリアン・カボシュ＝ドゥメルヴィル（J. Caboche-Demerville）の『若者たちのパンテオン』（*La Panthéon de la jeunesse*）に、リトグラフとともに再び登場する。宗教的な解釈を強要することなく、プラスコヴィに割かれた数ページは、最も献身的な娘を生んだ悪い「母」としてのシベリアの象徴的価値を示唆している。1855年12月末、アレクサンドル・デュマが創刊した『ムスクテール』（*Le Mousquetaire*）の読者たちに「有名な女性」の見本を紹介したエミール・デシャン（Émile Deschamps）は、「お嬢さん方」に年末の読み物としてプラスコヴィの物語を提供した。私たちは、これほどまでに高潔な個人、これほどまでに整った女性の姿を夢見ることはできなかっただろう。（…）デシャンは、その記事の最後で、後にありふれた言葉となるある言葉で締めくくった。「彼女はまるでジャンヌ・ダルクのように、天上から使命を授かったのだ。」「まるでジャンヌ・ダルクのように、使命を果たしたらすぐに死んでしまったのだ」と。コタン夫人の解釈がためらいを生む理由がここに垣間見える。恋をするプラスコヴィは、聖処女ジャンヌ・ダルクに匹敵させられない。ジャンヌとプラスコヴィを比肩させたことで、シベリアの少女はカトリックのフランス、世俗のフランスを和解させる統合者としての姿に変容したのである。[12)]

アル＝マタリーの指摘にあるように、児童向けの訓話の中では、天啓や神の加護を固く信じる信心深い少女としてプラスコヴィの行動が称えられる場合も、「宗教的な解釈を強要することなく」彼女の親への孝心が称えられる場合もあった。つまりプラスコヴィの物語は、そこに「宗教的な方向性」を含むか否かに拠らず、模範的な児童を提示する訓話として解釈されうる物語であった。1870年代以降、義務初等教育を共和主義国家の管轄に置き、小学校での道徳教育の内容から神や宗教的要素を排除しようとする共和派と、伝統に従い初等教育を教会の影響下に置き、道徳教育もカトリックの教義に基づくべきであると主張するカトリックとの間にヘゲモニー闘争が繰り広げられたが[13)]、「信心深い子ども」と「親孝行な子ども」の両方の要素を持つプラスコヴィの訓話は、共和派もカトリック派も道徳教育の題材としても扱うことができたと考えられる。この意味でプラスコヴィの逸話の広がり方は、普仏戦争（1870-1871）の敗戦後に、共和派とカトリック派との垣根を越えて愛国心の象徴と

12) Sarah Al-Matary,《Une Sibérie à l'usage des familles : la fonction édifiante de la figure de Prascovie Lopouloff en France(1806-1900)》, *L'Invention de la Sibérie par les voyageurs et écrivains français (XVIIIe-XIXe siècles)*, Institut d'Études Slaves, 2014, p.181-182.

13) 初等教育をめぐる共和派とカトリックのヘゲモニー闘争については、例えば以下の文献を参照。谷川稔『十字架と三色旗―近代フランスにおける政教分離』、岩波現代文庫、2015年。

して語られたジャンヌ・ダルクと類似するため[14]、アル＝マタリーは「シベリアの少女はカトリックのフランス、世俗のフランスを和解させる統合者としての姿に変容した」とすら指摘したのである。

この点に加え、天啓による行動、意思の強さ、たった一人の少女による途方もない偉業の達成、夭折というはかない運命、男性との恋愛を知らぬまま亡くなったとされる点など、プラスコヴィの実際の生涯とジャンヌ・ダルクの生涯との間にある多くの共通項も、彼女がジャンヌ・ダルクに並び語られた所以であろう。アル＝マタリーが「恋をするプラスコヴィは、聖処女ジャンヌ・ダルクに匹敵させられない」と述べるように、フランスで児童用の訓話の底本として好まれたのは、コタン夫人の小説ではなく、メーストルの『シベリアの少女』の方であったと考えられる。遠い日本に伝わる際にも、メーストル『シベリアの少女』方が訓話の底本として主流となったのは、フランスでの受容の様相とも関係している可能性がある。

3. 日本での受容の状況

日本での受容の状況については論文末に提示した表2を参照されたい。プラスコヴィの逸話が明治時代中期に日本に伝わり、大正時代初期までに複数の記事が見られる。一方、現代においては、フランス文学者の水谷謙三、中村義男がそれぞれ1940年代にメーストルの小説の翻訳を行ったことを契機として再度出版が見られるようになり、戦後には1950年代から1970年代に至るまで、児童読者向けにフランスの感動実話として紹介された。偕成社の「少女世界名作全集」などにも収められたことから、世界の名作の一つとみなされたことも判明する。

まず1887（明治20）年に、『孝女美談　沙漠の花』が上梓されたが、これはコタン夫人の『エリザベス、またはシベリアの流刑者たち』の翻訳であった。翻訳の底本に英訳を使用した重訳ではあるものの[15]、全訳されている。しかし、それ以降の作品には、コタン夫人の小説の特徴は見られず、メーストルの小説、またはそれを底本とした訓話が紹介されたことがうかがえる。明治期から大正期までの、メーストルの小説をベースとした作品群のもう一つの特徴は、プラスコヴィの逸話が『家庭雑誌』、『少女界』、『外国少女鑑』、『少女鑑』など、おもに女性読者向け、女児向けの雑誌および訓話集に掲載されたことである。これらの女性読者向けの本では、プラスコヴィが父に尽くす孝行娘という点が強調された。野村壽恵子訳

14) 古賀毅「国民育成教育における歴史的英雄の教材化―道徳的モデルとしてのジャンヌ・ダルクに関する記述を中心に」『早稲田大学教育学部 学術研究（教育・社会教育・体育学編）』49号、2001年、19-33頁。渡辺和行「英雄とナショナル・アイデンティティ―第三共和政フランスの歴史教育とナショナリズム―」、望月幸男他編『ネイションとナショナリズムの教育社会史』、昭和堂、2004年、285-320頁。

15)「凡例」『孝女美談　沙漠の花』、集成社書店、1887年、9頁。

『シベリアの少女』でも父と娘の関係がとくに着目された。単行本には以下のように、翻訳者自身の父親への献辞がまずは付された。

> 父様　此本をさし上げます。御徒然の御慰に御覧ん下さいまし。此少女の心意気、これが真実に娘の心で御座いますと私保証いたします。そして世の娘といふ娘に此の様な、やさしい殊勝な心を持たせたいと存じまして、拙い筆をも厭はず務の暇に、おこがましくも譯して見たので御座います。どうぞ御叱りは御免下さいます様に。[16)]

日本でプラスコヴィの話が女性向けに広がったのは、第一に孝女として両親、とくに父親に尽くす娘として評価されたためであると考えられる。そして、女性の訓話集の中でも貞女の模範が多く見られたことも考えると、恋愛・結婚することなく夭逝し、もっぱら親孝行のために生きた貞女としての側面も重要であっただろう。明治期、大正期における逸話の広がりを背景として、『シベリアの少女』は「理想的なる少女小説」として、雑誌『少女』の中で紹介されたのである。

4. 野村壽恵子訳『少女小説　シベリアの少女』の出版の経緯

野村壽恵子訳『シベリアの少女』は、メーストルの原作の初の全訳である。連載された雑誌『少女』は、時事新報社が 1913（大正 2）年に創刊した総合誌で、文芸読物を中心とし、健全と純潔がモットーだったと言う[17)]。一方で科学記事、『時事新報』の記者による時事関係の記事、時事新報社の創立者である福沢諭吉の『女大学評論 / 新女大学』のページ広告も毎号のように見られ、外国文化も積極的に紹介された。「翻訳少女小説　シベリアの少女」の連載に際する作品紹介では、次の文言が見られる。

> 殊に野村先生の有名なる仏訳物、シベリアの少女は欧州の少女でこの書を愛読せぬものは少女としての資格がないと云はれた位痛快なものでありますから、矢張り日本のでも、この小説を愛読せぬ方は文明国の少女としての資格はあるまいと思ひます。[18)]

このように、ヨーロッパの少女読者に非常に読まれていることがアピールされた。翻訳者の野村壽恵子は、この作品以外に著作はなく、『少女』編集部の依頼により単発で翻訳した。経歴については『少女』紙面の記述によると、東京女子師範学校を卒業し、三輪田高等女学

16）野村壽恵子、献辞、『シベリアの少女』大倉書店、1916 年、ページ記載なし。
17）日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍、1988 年、378 頁。
18）「新春二月号」『少女』大正 5 年 1 月、第 37 号、80 頁

校で教鞭をとり、女子中等教育にも携わったことがあるとされる[19]。特筆すべきは、単行本版の「此書の終りに」にも明記されているように、彼女がフランス語の原典から直接翻訳を行ったことである。野村壽恵子はフランス語学者、野村泰亨（1852-1935）の養女で、次の回想によると、十五六歳から父親の仏和辞典執筆の手伝いをし、フランス語は当時堪能であった。

> 私などに取つてはまことにいい父で、私は大部分父の懐に眠つたと申してよろしうございませう。私の実父は森則義と申して、学習院でやはり仏蘭西語の教官を致して居りましたが、実父と父とは十六位からの友達で、私の母が亡くなりました時に、己のところには子供が無いから貰つてやらう、と云つて連れて参りましたのださうで、自然母よりも父の厄介になつたことが多いかと存じます。父は子供が好きでございまして、（…）私の四つ五つ位からでせうか、父は私と一緒に火燵へ当つたり、胡坐をかいて膝の上に私を置いたりしながら、いろいろ御話をしてくれました。あの「家なき子」のレミーの話などはその頃毎夜聞いたおぼえがございます。（…）（引用者註：父・野村泰亨は）白水社から新刊書を買つて来て読んで居りました。（…）私も父の仕事は十五六の時から手伝ひ通しで、辞書を作ります時にも、写字や校正の手伝ひをやらされました（…）。[20]

『シベリアの少女』の連載を強く望み、実現したのは、雑誌『少女』の編集長で児童文学者でもある、松美佐雄（1879-1962）であった。次のように、松美がこの小説を忘れられず、8年間探した末に、野村家にあった原書を壽恵子が訳すことになったとある。

> プラスコヴィと云ふ名は、私が八年前から懐かしく思ってゐました。（…）プラスコヴィは父の罪を雪ぐためにシベリアから露都までこの長途の旅行をせねばならぬと云ふ事を覚悟すると共に先づ努めたのは躯力でありました。健康と云ふ事に意を注いで長途の旅行に自分の躯力が耐えられると云ふ自信が出来ますと共に、此事を父に願つたと云ふのでした。私はこの話を大層面白く思つて如何なる題名のもとに書籍となつて居るかと調べて見ますと『孝女美談沙漠の花』と云ふのだと云ふ事です。（…）其後私は時事新報に入社、今の「少女」を編集する事になりました。従つて、「孝女西比利亜の花と云ふやうな読みものがあつたなら、どんなに読者が満足するだらう」と思ひました。（…）英訳を友人に探して貰ひましたが、全訳は日本にはないやうでした。其処で今度は原書ではあるだらうと思ひ、少女記者の吉田深雪さんの友人で仏蘭西語に堪能なる本編の訳

19) 松美生「此号の呼び物」（「編集便り」）『少女』大正5年1月、第37号、119頁
20) 野村壽恵子「父野村泰亨のことども」『伝記』（伝記学会）4巻4号、1937年4月、37-41頁。

者野村壽恵子さんに尋ねて貰ひますと、野村さんは振り分け髪のお幼少ころから愛読して居た書籍だと云ふ事でした。其処で私は直にこの書籍の全訳を野村さんにお願ひする事にいたしました。一体嬉しいのは野村さんは日本に於ける有名なる仏蘭西語学者の野村泰亨先生のお嬢さんで、東京女子師範学校出の女子教育家でありますから、最も適当なる事業と思つたからであります。本書の如き完全なる少女小説でも翻訳者の人格によつては嫌らしく聞える事がありますが、訳者にとつても本編が理想的なる書籍であり、本編にとっても訳者が理想的なる人格であれば、此位理想的なる少女小説はなからうと思ひます。（…）此書の如きは永久に日本の少女に愛読せられるべきものだと思ひます。私は刊行に先立ち、この書の草稿を纏めましたとき、あかず再読して、日本に於ける理想的の少女小説として刊行する事の誤りでない事を深く信じて野村さんの此事業に向つて感謝いたしました。[21)]

この引用からは、松美が『孝女美談 沙漠の花』など明治期に出版された作品により、プラスコヴィの逸話をすでに把握しており、メーストルの原作の全訳を望んだことが判明する。また、上の引用では「理想的なる少女小説」「理想的なる書籍」というように「理想的」という言葉が多用され、いかに松美が原作を高く評価していたかが分かる。そして翻訳者の野村壽恵子自身は、翻訳の経緯を次のように述べている。

丁度去年の只今頃でしたと思ひますが、今上天皇陛下御即位の大典を御挙げ遊ばしたので世は賑はつた或日の事、時事新報社発行の雑誌少年、少女の記者で吉田みゆき様と申す方が御見えになりました（…）其内、御話は雑誌の事に移つていつて、荒野の花とか沙漠の花とかいふ孝女実話があつたら訳してもらひたい。十年来も少女の主筆松美先生が、お探しになつてゐらつしゃるといふ御話ですと仰せらましたので、早速本箱をさがしましたら、奥の方に埃だらけになつてはいつてゐました。なんでも二十年も埋もれてをつたもので、幼い時に父から話にきいたり読でも見たりした本で誠に外国には珍らしい孝女談です。成程、これは堅実を標榜なさる少女の記者先生が、おもとめになるのも御尤だと存じました。

此のお談は本文のはじめにもある通り、此頃の小説家は、皆書かなければならない位有名でしたが、多くはコテン夫人のエリザベスといふ本にあるやうに、事実を離れた芝居じみたものですが、このメーストル先生のは、それと全く異つて、孝女をほめるのに適切な語を用ひて、実歴をのべてありますので、今日一部に流行する、奇想に花を咲か

21）松美佐雄「此書の終りに」『シベリアの少女』大倉書店、1916年、249-253頁。

せたり、少女の心をそそつたりするのとは、類がちがつてをります。これならば上品な少女の読み物として、少しも恥かしい事はありません[22)]

引用の後半にあるように、野村は、コタン夫人の作品も把握しつつ、メーストルの作品の「実歴がのべて」あり、「孝女をほめるのに適切な語」が用いられた、「上品な少女の読み物」である点、つまり、小説の堅実な筆致を特に評価していた。本稿第5章で後述するように、単行本版の野村訳には、原典から削除した箇所がほとんどなく、それは松美佐男編集長や翻訳者の野村自身による原作の絶賛も理由としてある可能性がある。

5. 野村壽恵子訳『シベリアの少女』の底本と章構成

まず、翻訳の際に使用された原典の版について、明らかにしたい。大倉書店から出版された野村壽恵子訳『シベリアの少女』の単行本版には、本編である小説の後に11頁にわたる「著者小伝」が付されている。その末尾に「以上は仏国学士会会員、ヂュール、クラールチーと申す方が、メーストル全集に、お付けになつた序のうちから引き抜いた先生の小伝で御座います[23)]」とある。このことから、翻訳の底本としては、ジュール・クラルティ（Jules Claretie, 1840-1913）による序文が付されたフラマリオン版の『グザヴィエ・ド・メーストル作品集』が使用されたと考えられる。フラマリオン版の『グザヴィエ・ド・メーストル作品集』の初版刊行時期は不明であるが、フランス国立図書館OPACでの検索により、1906年には刊行が確認され[24)]、野村壽恵子がそれを参照することが可能であることも判明した。したがって、本章でも原典と翻訳との比較のためにフラマリオン版の『グザヴィエ・ド・メーストル作品集』を参照した。ジュール・クラルティの序文については、原文では3章で構成されるが、その第2章までが野村壽恵子により抄訳され、「著者小伝」が書かれた[25)]。

次に翻訳の様相に関し、小説の構成について述べたい。原典ではまったく章分けはされていないのに対して、野村訳では単行本版において「はしがき」ののちに小説本編が57章に分けられ、各章に漢数字による章番号と章題が付されている。たとえば、第1章には「一、追放された貴族」、第2章には「二、白魚のような手」、第3章には「三、お父様の失望」というように、である。章分けについては、原典の段落の途中で翻訳の章の分岐点がある場合もあり、野村の判断で読者に読みやすいよう切れ目が工夫されたことが分かる。また、雑誌『少女』での連載においては、第45章「四十五、飛脚」まで、つまり主人公の父親の恩赦が

22) 野村壽恵子、「はしがき」、『シベリアの少女』大倉書店、1916年、1-3頁。
23) 野村壽恵子「著者小伝」『シベリアの少女』大倉書店、1916年、248頁。
24) フランス国立図書館OPAC　https://catalogue.bnf.fr/index.do（2023年10月16日最終閲覧）
25) Jules Claretie《Préface》, *(Œuvres de Xavier de Maistre* ; Paris, Flammarion, s.d. (vers 1920), p.I-XXIII. 野村壽恵子「著者小伝」『シベリアの少女』大倉書店、1916年、238-248頁。

決定され、自由の身となるまでが掲載された。その後のプラスコヴィの生涯については「終編はこの孝女が、キユー[26]の寺で肺病で斃れるところで、余り可哀さうですから目出度いところで完了として戴きました。（記者）[27]」と書かれ、『少女』における連載では省略された。

57 章の内容、章構成についての概要は、以下の通りである。まず第 1 章から第 7 章において、主人公の父親の境遇が語られ、プラスコヴィは父親の恩赦を求め、皇帝に直訴するためのサンクトペテルブルクへの旅を考えつき、両親にその考えを話す。第 8 章から第 17 章では、両親の反対を受け、三年間プラスコヴィは出発のための修行、通行許可証入手などの準備をし、ようやく両親の許しを得て、イシムを出発する。出発の際、父と同じくシベリア囚徒となっていた隣人二人の助けを受けたことについても書かれる。第 18 章から第 22 章では、まずはキーウを目指した初期の旅の困難が書かれた。第 23 章で、盗賊夫婦の家に泊まり、夫婦を改心させた有名な挿話が見られる。第 24 章から第 31 章でサンクトペテルブルクに到着するまでが語られる。越冬のためのエカテリンブルクでの滞在、ニジニ・ノヴゴロドの修道院での病気療養などの挿話があり、貴族の夫人、修道院長による手厚い保護を受けたとされる。また、第 30 章において、プラスコヴィが本願を成就した暁にはニジニ・ノヴゴロドの修道院に戻り、修道女となることが誓われた。第 32 章から第 40 章では、プラスコヴィはサンクトペテルブルクで奔走した結果、皇太后への拝謁を許され、その後、皇太后の計らいで、皇帝・皇后に拝謁する。第 41 章から第 45 章では、プラスコヴィの父の恩赦が決定され、父親にそれが知らされると同時に、本願を成就させたプラスコヴィは修道女になるためサンクトペテルブルクを後にする。第 46 章から第 48 章では、プラスコヴィの出発を助けたイシムの隣人二名にも恩赦が下される。第 49 章から第 52 章まで、ニジニ・ノヴゴロドの修道院での、プラスコヴィと両親のつかの間の再会、今生の別れが描かれる。第 53 章から第 57 章までに、修道院で肺病にかかったプラスコヴィが亡くなるまでの様子が書かれる。

このように、原典の小説の筋が尊重されて翻訳された。そればかりでなく、たとえば次のように、野村壽恵子は、原典における細かい挿話も忠実に翻訳した。エカテリンブルクとニジニ・ノヴゴロドへの滞在後は、そこで世話になった貴族の夫人、修道院長が紹介する多様な知己の助けを得ながら、サンクトペテルブルクでプラスコヴィは目的を果たす。実話に基づくためか、プラスコヴィを援助する人物名は「L 夫人（Madame de L**）」などのようにイニシャルのみで表記され、サンクトペテルブルクでは彼女を助ける多数の人物が複雑に交錯するが、そういった複雑な挿話も単純化されることもない。サンクトペテルブルクでプラスコヴィが、協力的でない人物の下で、無為に日々を過ごしてしまう様子なども原文にある通りに翻訳される。

26）原文 での表記は《Kiew》で、現・ウクライナの首都キーウを指す。
27）野村壽恵子「翻訳少女小説　シベリアの少女」『少女』第 46 号、1916 年 10 月、41 頁。

こうした点に、本稿第４章で述べたように、この小説の原典であるメーストルの『シベリアの少女』そのものを「欧州の少女でこの書を愛読せぬものは少女としての資格がないと云はれた位痛快なもの[28)]」として評価した翻訳者、編集者の原典への思い入れ、完訳を世に出したいという強い思いが表れているとも考えられる。

6. 野村壽恵子訳『シベリアの少女』の翻訳の様相

最後に、翻訳の具体的な様相を見ていきたい。一言で述べるならば、野村壽恵子訳は饒舌な翻訳であるといえる。本稿第５章で述べた通り、野村訳は原典を省略した箇所は少なく、おおむね忠実な訳である。しかしその一方で、加筆や改変も多く見られ、野村は実話に基づく原作の堅実な筆致を評価しつつも、日本の少女読者に伝えるための配慮を行っている。その特徴を本稿では次の５点に整理する。第一に、ロシアの歴史や文化に関する説明の加筆、第二に、直接話法への転換、第三に、プラスコヴィの美しさに関する描写、第四に、プラスコヴィの孝心を強調する加筆、第五に、プラスコヴィの控えめでか弱い性格、周囲に愛される性格についての加筆、の五点である。

第一の特徴について、たとえば原典の冒頭部にある「パーヴェル一世の治世の終わりごろ（《vers la fin du règne de Paul Ier》）」という一節を訳す際には、「私が此度書きますのは、まだこんな便利な鉄道（引用者註：シベリア横断鉄道）などのない、昔、丁度今から百年ばかり前の事で、あの南下政策で名高い、ピーター大帝の一代後ポール一世と申上げる御方の御代の末の事[29)]」と、日本の読者が知る「鉄道」「南下政策」などの事項にも言及しつつ、説明が書き加えられた。また、翻訳の第13章「十三、辻占い」において、ロシアでは月曜日が不吉な曜日とされるという説明を原典ではメーストルが脚注に加えているのに対し[30)]、野村は翻訳の本文にその説明の一部を組み込み、「一体ロシアには、月曜日を悪日と申して、事を仕始めるのを嫌ふ風があります。とりわけて、旅立ちを忌みます[31)]」と記し、本文内で読者の理解を促す配慮が見られる。

第二から第五の特徴については、それらが顕著に表れている、二つの引用部を例にあげ、示していきたい。まず、プラスコヴィのシベリアでの家族との生活を描写する次の一節である。最初に原文を、次に筆者による拙訳を、最後に野村訳を示す。

---

28)『少女』1916年1月、第37号、80頁。
29) 野村壽恵子『シベリアの少女』大倉書店、1916年、1-2頁。
30) *JS*, p.245.《En Russie, le lundi passe pour un jour malheureux parmi le peuple et les personnes superstitieuses. La répugnance pour entreprendre quelque chose, mais surtout un voyage, le lundi, est si universelle, que le très-petit nombre de personnes qui ne la partagent pas s'y soumettent par égard pour l'opinion générale et presque religieuse des Russes.》
31) 野村壽恵子『シベリアの少女』大倉書店、1916年、43-44頁。

La jeune Prascovie contribuait par son travail à la subsistance de ses parents, en aidant les blanchisseuses du village ou les moissonneurs, et en prenant part à tous les ouvrages de la campagne dont ses forces lui permettaient de s'occuper: elle rapportait du blé, des œufs, ou quelques légumes en payement. Arrivée en Sibérie dans son enfance, et n'ayant aucune idée d'un meilleur sort, elle se livrait avec joie à ces pénibles travaux, qu'elle avait bien de la peine à supporter. Ses mains délicates semblaient avoir été formées pour d'autres occupations. (*JS*, p.234–235)

年若いプラスコヴィは、村の洗濯女や収穫者を手伝い、自身の力の限り、田舎の仕事に参加し、両親の生計を助けていました。彼女は仕事の報酬として小麦、卵、いくつかの野菜を持ち帰りました。幼い頃にシベリアに渡った彼女はもっと良い運命などまったく考えつきもしなかったので、この過酷な仕事に喜び勇んで身を投じましたが、その苦労は大変なものでした。その繊細な手は他の仕事のために作られたかのようでした。（拙訳）

寒いシベリアの片山里にゐても、父母のあたたかさに変りはなく、這えば立て、立てば歩めと愛育せられて、プラスコヴィは、日増しに成人いたします。悲しい明け暮れの中にもこれなくては叶はぬ、両親の掌の内の玉は、只両親の心の慰藉であるばかりでなく、近隣の人々にも可愛がられて、彼方此方で頼まれてはお洗濯を手伝つたり、収穫した作物を運んだり、御庭の掃除をしたり、出来る丈の荒仕事までをして、其の賃金を得て家の暮らしの足しまへにします。また時には其の賃銭のうちで麦や玉子や何か他のお野菜などを買って帰ることもありますが、ご両親は別段に美味と言つて召上りますやうに思はれて、嬉しさの余り、耐へられる丈の労働をも何のいとひもなくいたします。生れて間もなくから此荒野に人となつたプラスコヴィは都の賑はしさも都少女の艶やかさも知りませぬ。また、前途に何の望みもない、勿論自分の家の由緒も、秘密も知りませぬから、只もう田舎少女の通り、朝早くから夜晩くまで、力の限り働いて、疲れた身も両親の喜ぶ御顔を見れば、なほるようでした。が、此の少女の細い白い手先は、こんな荒仕事をするのには、あんまり釣り合はないように美しいのを、心弱い御母様は、人知れず悲しく思ひになりました。[32]

野村訳における下線部が、原典にはない表現であり、翻訳における加筆である。この一節に見られる加筆において、もっとも特徴的なのは、プラスコヴィが両親から大切に育てられ

32）野村壽恵子、『シベリアの少女』大倉書店、1916 年、6–7 頁。

た娘であり、プラスコヴィも両親の喜びのために尽くす娘であったということが、野村の加筆によって大いに表現されている点である。「あたたかさ」「愛育」「掌の内の玉」「両親の心の慰藉」という言葉、プラスコヴィが両親の喜ぶ顔を見て「嬉しさの余り」労働に従事するという記述、「疲れた身も両親の喜ぶ御顔を見れば、なほる」という加筆により、プラスコヴィが孝子であり、「家の娘[33)]」として申し分のない少女であったことが強調されている。

さらに原文では、プラスコヴィが働いている理由として、生計を助けるためであるとされるが、翻訳文ではプラスコヴィが両親だけではなく「近隣の人々にも可愛がられ」、農作業などの仕事を頼まれ働いたのであるとされている。つまり彼女が周囲から愛された少女であった点が加筆されている。

また、たしかに原文にもプラスコヴィの手について「繊細な手《Ses mains délicates》」という表現があるものの、翻訳文ではその部分が「細い白い手先」、「荒仕事をするのには、あんまり釣り合はないように美しい」とあり、「細い」「美しい」などの形容詞は、主人公の美しさ、か弱さをより想起させる。そしてか弱いとされたのは、プラスコヴィだけではなく、その母も同様であり、「心弱い御母様」や「人知れず悲しく」などの表現で、厳しい生活に人知れず耐える妻・母の姿を想起させる。

次に、プラスコヴィがサンクトペテルブルクに一人で行き、皇帝に直訴することを考えつく次の場面を検討したい。

> Ce fut à cette époque, et dans la quinzième année de son âge, que la première idée d'aller à Saint-Pétersbourg demander la grâce de son père lui vint à l'esprit. Elle racontait elle-même qu'un jour cette heureuse pensée se présenta à elle comme un éclair, au moment où elle achevait ses prières, il lui causa un trouble inexprimable. Elle a toujours été persuadée que ce fut une inspiration de la Providence, et cette ferme confiance la soutint dans la suite au milieu des circonstances les plus décourageantes. Jusqu'alors l'espérance de la liberté n'était point entrée dans son cœur. Ce sentiment nouveau pour elle la remplit d'une grande joie : elle se remit aussitôt en prières; mais ses idées étaient si confuses, que ne sachant elle-même ce qu'elle voulait demander à Dieu, elle le pria seulement de ne pas la priver du bonheur

33)「家の娘」という言葉は、明治時代中期以降の言説空間おいて、家庭内の役割を果たすことが求められた少女を表す概念として久米依子が下記の論文内で用いた。ここでの「家」は成員の相互の愛情で結ばれた近代的家族のイメージで語られる一方で、少女たちにとってはあくまで娘としての「つとめ」を果たすべき規範と義務の場所とされる。（久米依子「少女小説―差異と規範の言説装置」、小森陽一ほか『メディア・表象・イデオロギー――明治三年代の文化研究』小沢書店、1997 年、195–222 頁、とりわけ 196 頁。）

qu'elle éprouvait, et qu'elle ne savait définir. Bientôt cependant le projet d'aller à Saint-Pétersbourg se jeter aux pieds de l'empereur et lui demander la grâce de son père, se développa dans son esprit et l'occupa désormais uniquement. (*JS*, p.236-237)

父の許しを請うためにサンクトペテルブルクに行くことを思いついたのは、この時、15歳の時でした。ある日、お祈りを終えたところで、この幸せな考えが稲妻のように浮かんできて、言いようのない混乱を招いたと、彼女自身が語っていました。彼女は常に、これは神の摂理による霊感であると確信しており、この確固たる自信が、最も落胆する状況の中でも彼女を支えたのです。それまでは、自由という希望は彼女の心にありませんでした。しかし、自分の考えが混乱していて、神に何をお願いしたいのか自分でもわからず、ただ、自分が体験しているどう定義していいのかわからない幸福を奪わないでほしいと神に懇願したのです。しかし間もなく、サンクトペテルブルクに行って皇帝の足元に身を投げ、父の赦免を請うという計画が彼女の心に芽生え、それ以来、彼女の頭の中はそれだけでいっぱいになったのです。（拙訳）

何でも此の幸な思想は、まるで夏の夜の稲妻の様に、或日ひよいとプラスコヴィの心に閃いたといふ事でした。其様事は、なかなか話しませんでしたが、後に願が叶つてついに口が滑つたとのことです。そして、それは神様の御託宣であると信じ抜いてをります。此のような堅固な信仰が何時までも弱い少女の心をしつかり支へて居ました。此時までは、自由などといふ考えは毛頭無かつたのですが、此新しい感じが、此少女に大層愉快な気分を味あはせました。そして、平日のよりは欲張つて神様に御いのりをしますが、さて自分は何を願つてよいのか分かりませんから、只、
「何だか知りませんが、私が受けた幸を、どうぞ私から奪つて下さらないように」
と祈るのがせいぜいでした。つまりまとまつた考えが、プラスコヴィにはまだできなかったのでせう。曖昧な、まぁ何でも神様がいいやうに定めて下さるだろうと位で。
程なく、よい考へが浮びました。
「直訴をしやう。私は天子様のお膝元にひれ伏して、御父様の罪をおゆるし下さるやうに御願ひしに、ペトログラードに行かう」
と決心した以来は、只もう其事ばかりをあけ暮れに考へてをりました。
（野村壽恵子『シベリアの少女』15-16 頁。）

野村訳の下線部が原典にはない表現の加筆、改変である。まず、この部分で原文に直接話法は使用されていないが、上記の引用の後半部では、野村は地の文の表現を直接話法として

翻訳した。これによりプラスコヴィの祈り、考えが、生き生きと読者に伝わる効果がある。

次に加筆に関しては、たとえば、原文ではプラスコヴィが語り手に自分の旅について話したことについて「彼女自身が語っていた（《Elle racontait elle-même》）」とされたのに対し、翻訳では自らの意思で話したのでなく、「なかなか話しませんでしたが」「口が滑つた」と書かれた。そして、プラスコヴィの神へ父の恩赦を祈ったのも「平日のよりは欲張つて」なされたとし、旅の思い付きについても、「神様がいいやうに定めてくださるだろう」と自分の意志だけではなく、神に決定を委ねている態度も書かれた。そしてまた、サンクトペテルブルクへの旅は「神様の御託宣」である、という確信が、原文では「最も落胆する状況の中《au milieu des circonstances les plus décourageantes》」でプラスコヴィを支えたとあるのに対し、翻訳文では「弱い少女の心」を支えたのであると改変された。つまり、サンクトペテルブルクへの旅を最初に思いつくこの重要な場面において、原文において意志的で能動的なプラスコヴィは、翻訳文においては原文よりつつましく、受動的で、「弱い少女の心」の持ち主として表現されている。

本章で検討した翻訳文の加筆、改変に見られる諸点には、次のような翻訳者の配慮が看取される。まず、ロシア文化に関する説明の加筆、直接話法への変換については、読者に対し、異国の地で起こる物語に対する理解を促し、より身近に、生き生きとその内容が伝わるように、配慮されたという点である。

次に、プラスコヴィの両親への献身的な態度や孝心の強調、そして彼女が美しく、周囲に愛される、控えめかつか弱い少女として描かれたことは、翻訳者がこの「理想的なる少女小説」の中で、どのような少女を少女読者の模範として提示しようとしたかという点に関わる。つまり、愛らしく、控えめかつか弱い存在でありながら、孝心によりけなげに一人で困難を乗り越える少女であること、翻訳ではこうしたプラスコヴィ像が、翻訳文による加筆があることで、より鮮明に形成されたと考えられるのである。

7. まとめ

野村壽恵子訳において提示されたプラスコヴィ像は、孝子の模範であると同時に、明治時代後期以降の少女小説、少女雑誌において提示された、あるべき少女像の規範とも共通点が見られるように思われる。たとえば、久米依子によると、明治時代末期には、少女雑誌で伝えるべき新しい「少女らしさ」が模索され、従来の「温和にして道理に従うこと」、「高潔貞淑」、「分を忘れないこと」という抑制的で内的な規範から、周囲に対して「愛」を持つこ

と[34]、そして他者から「愛される」少女となり[35]、外からも「愛らしく」見えるよう外面的にも「愛らしさ」「あどけなさ」を持つことへと転換が起こった。「少女らしい」振る舞いとは「愛らしい」「あどけない」振る舞いであるとされ、一方で「大人らしい」振る舞いは抑制され、成長を急がず少女のままでいることが求められた。[36]

野村壽恵子訳『シベリアの少女』のプラスコヴィ像は、孝子としての抑制的で内的な規範と、周囲から「愛される」少女という新しい「少女らしさ」との両方を備えた少女像であるともいえる。もっとも、もともとフランスでも児童向けの訓話として19世紀末から20世紀に流布した《enfant pieux》としてのプラスコヴィ像そのものが、優れた孝子譚として日本で受容され、明治20年代から日本の読者に紹介されてきた側面は看過してはならない[37]。しかしながら、『シベリアの少女』が大正時代初期の少女雑誌において、女子教育にも携わった野村壽恵子により「少女小説」として翻訳される中で、大正期の日本の少女読者の模範として提示するのに相応しいプラスコヴィ像により近づけられたということは言えるのではないだろうか。

本稿では、紙幅の関係もあり、とくに原典と翻訳の本文の比較について、他の個所が十分に論じられなかった。別稿に譲りたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和3年度～5年度）の研究成果をまとめた一部である。

34) 久米依子は、「愛」を持つことを説いた論説として、巌谷小波「愛の光」（『少女世界』第1巻3号、1906年11月）を挙げた。（久米依子、前掲論文、「少女小説―差異と規範の言説装置」、217頁。）

35) 久米依子は、「愛らしさ」を説いた論説として、沼田笠峰「少女教室」（『少女世界』第2巻3号、1907年2月）を挙げた。そこには「皆さんは、赤ん坊らしくもなく、また大人らしくもなく、どこまでも少女のやさしい、あどけない、ハキハキした心を失はずして、至るところで、愛せらるやうにならねばなりませんよ」と説かれた。Cf. 久米依子、前掲論文、「少女小説―差異と規範の言説装置」、217-219頁。

36) 久米依子、前掲論文、「少女小説―差異と規範の言説装置」、217-219頁。

37) 徳田進、「明治期の女子用伝記物と孝子譚」『孝子説話集の研究―二十四孝を中心に』井上書房、1963年、277-278頁。

表 1：プラスコヴィ・ロプロフの逸話　19 世紀フランス（一部イタリア）での刊行物一覧

1. Sophie Ristaud Cottin, *Elisabth,ou les Exilés de Sibérie*, 1806（小説）
2. Joseph Aude et Henri-Joseph Thuring, *Élisabeth ou l'Héroïsme filial,* 1806（メロドラマ）
3. Hippolyte Dorvo, *Élisabeth ou les Exilés en Sibérie*, 1806（メロドラマ）
4. Giovanni Carlo Cosenza, *Elisabetta Potowski,* 1814（喜劇、イタリア）
5. Charles Guilbert de Pixérécourt, *La Fille de l'exilé ou Huit mois en deux heures*, 1818（メロドラマ）
6. Luigi Marchionni, *Elisabetta ossia La Figlia dell'esiliato*, 1820（喜劇）
7. Xavier de Maistre, *La Jeune Sibérienne*, 1825（小説）
8. Gilardoni, Domenico / Donizetti, *Gli esiliati in Siberia o sia Otto mesi in due ore*,1827（喜劇）
9. Michel Masson, *Les Enfants célèbres, ou Histoire des enfants de tous les siècles et de tous les pays, qui se sont immortalisés par le malheur, la piété, le courage, le génie, le savoir, et les talents*, 1837（児童用道徳読本）
10. Émile Deschamps,《PRASCOVIE LOPOULOFF》*Causeries littéraires et morales sur quelques femmes célèbres*, 1837（女性読者用道徳読本）
11. Léon Guérin,《La Fille de l'exilé》, *Exemples de dévouement*, 1840（道徳読本）
12. J. Caboche-Demerville,《PRASCOVIE LOPOULOFF》*Panthéon de la jeunesse : Vies des enfants célèbres de tous les temps et de tous les pays*, 1842（児童用道徳読本）
13. Leuven et Brunswick, *Élisabeth ou la Fille du proscrit*, 1853（歌劇）
14. Émile Deschamps,《Simple lecture sur quelques femmes célèbres》, *Le Mousquetaire,*1855.12.（新聞連載）
15. Adam Vuillet, *Scènes et aventures de voyages, histoires et récits destinés à intéresser à l'étude de la géographie*, 1857（児童用地理・道徳読本）
16. Théodore-Henri Barreau, *Livre de morale pratique ou choix de préceptes et de beaux exemples*, 1888（道徳読本）
17. M. l'abbé A. Saint-Cyr,《L'Assistance due par les enfants à leurs parents parvres》, *Devoirs des enfants envers leurs parents*,1891（児童用道徳読本）
18. *"Prascovie", drame russe en 5 actes, tiré de "la Jeune Sibérienne" de Xavier de Maistre,*1894（メロドラマ / オペラ）
19. Mme Marie de Grandmaison,《PRASCOVIE LOPOULOFF》, *Les héroïnes de l'amour filial*,1899（女児用道徳読本）

※上記の表は、以下の文献・サイトを参考に作成した。

フランス国立図書館 Gallica https://gallica.bnf.fr/accueil/fr/content/accueil-fr?mode=desktop（2023 年 10 月 16 日最終アクセス）

Sarah Al-Matary,《Une Sibérie à l'usage des familles : la fonction édifiante de la figure de Prascovie Lopouloff en France (1806-1900)》, Sarga Moussa et Alexandre Stroev, *L'Invention de la Sibérie par les voyageurs et écrivains français (XVIIIe-XIXe siècles*), Institut d'Études Slaves, 2014, p.179-187

Charlotte Krauss,《De Prascovie Loupalova à Élisabeth Potoska. La fortune d'une matière sibérienne, du roman français à l'opéra italien》, *Revue de littérature comparée* n° 335, 2010/3, p.273-290

表 2 : プラスコヴィ・ロプロフの逸話　日本での刊行物一覧

1. 勿陳（リストウ）夫人著、浅井栄熙、坂井筒蔵訳 『孝女美談　沙漠之花』集成社、1887 年。（単行本）
2. 岡田紫櫻「プラスコビア」『家庭雑誌』（家庭雑誌社）84 号、1896 年 8 月。（雑誌掲載）
3. 下田歌子「五 プラスコヴイ（露西亞）」『外国少女鑑（少女文庫 第四編）』博文館、1902 年所収。（単行本所収記事）
4. 米光関月「少女小説　一心」『少女界』（金港堂）、第 9 巻 10 ～ 11 号、1910 年 8 月～ 9 月。（雑誌連載）
5.「プラスコヴイ」金港堂書籍株式会社編輯部編『少女鑑』金港堂、1910 年所収。（単行本所収記事）
6.「十五歳の少女、風雨に悩み盗賊に逢ひて後皇帝に謁して流竄の父を救ふ（親思ひの少女プラスコヴイ）」、高須芳次郎『東西名婦の面影 金言対照（家庭百科全書 第 32 編）』博文館、1911 年所収。（単行本所収記事）
7. アリス・コクーラン、林静太訳「模範の少女」『婦人の典型』、警醒社書店、1914 年所収。（単行本所収記事）
8. メーストル著、野村寿恵子訳「翻訳少女小説 シベリアの少女」『少女』（時事新報社）37 ～ 46 号、1916 年 1 月～ 10 月。（雑誌掲載）
9. メーストル著、野村寿恵子訳 .『シベリアの少女』大倉書店 , 1916 年。（単行本）
10. ザヴィエ・ド・メーストル著、水谷謙三訳『シベリアの少女 : 他一篇』長崎書店、1940 年。（単行本）
11. 中村義男「シベリヤの乙女」、『コーカサスの捕虜』、山根書房、1944 年所収。（単行本所収記事）
12. グザベート・メストル、田沼利男訳『シベリヤの少女』、実業之日本社、1949 年。（単行本）
13. 岡田弘『シベリヤの少女』、白水社、1950 年。（単行本、フランス語教科書）
14. 訳者不詳『野越え山越え』（カバヤ児童文庫第 10 巻第 3 号）、カバヤ児童文化研究所、1953 年。（単行本）
15. 小野忠孝「シベリヤの少女」『少女クラブ』31 巻 3 号、講談社、1953 年 2 月。（雑誌掲載）
16. 野田開作『世界少女名作全集 19 あらしの白ばと』、偕成社、1959 年。（単行本）
17. 永井繭二「プラスコビーのたび」『3 年の学習』11 巻 8 号、学習研究社、1956 年 11 月。（雑誌掲載）
18.「シベリアの少女」、子どもの生活研究会編『荒海の天使―勇気のある人の話（愛の学校 7）』、ポプラ社、1964 年。（単行本所収記事）
19. 井上明子「シベリアの少女」『小学四年生』第 44 巻 9 号、小学館、1965 年 12 月。（雑誌掲載）
20. 金沢秀高「とくべつまんが シベリアの少女」『小学三年生』20 巻 12 号、小学館 1966 年 3 月。（雑誌掲載）
21.「シベリアの少女」『ほんとうにあった世界の美しい話 2』、講談社、1963 年所収。（単行本所収記事）
22.「シベリアの少女」、子どもの生活研究会編、『荒海の天使 勇気のある人の話（愛の学校 7）』ポプラ社、1964 年。（単行本所収記事）

23. 池田宣政『シベリアの少女』女子パウロ会、1974 年。（単行本）
24.「五年生が喜ぶ冬のお話集 冬の感動実話シベリアの少女」『小五教育技術』28 巻 8 号、小学館、1974 年 10 月。（雑誌掲載）
25. メストル原作、名木田恵子著『シベリアの少女（マーガレット文庫 . 世界の名作 14）』、集英社、1975 年。（単行本）

※上記の表は、以下の文献･サイトを参考にするとともに、下記の資料館の現地調査、レファレンス調査にも依拠し作成した。

加藤一輝「訳者改題」グザヴィエ・ド・メーストル、加藤一輝訳『部屋をめぐる旅 他二編』幻戯書房、2022 年、288-289 頁。

国立国会図書館オンライン　https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/　（2023 年 10 月 16 日最終アクセス）

大阪府立中央図書館国際児童文学館、国立国会図書館東京本館、東京都立多摩図書館での現地調査・レファレンス調査。

Reception of a French Novel in Girls' Magazines in the Taisho Period
—A Study of Xavier de Maistre's "La Jeune Sibérienne" Translated by Sueko Nomura

Kimiko WATANABE

La Jeune Sibérienne (1825), a French novel by Xavier de Maistre (1763–1852), was introduced to Japan during the Meiji period. The first complete Japanese translation of the novel, translated by Sueko Nomura, was titled "Siberia no shōjo." It was serialized in the girls' magazine *Shōjo (Girl)* published by Jiji-Shimpo-sha from January to October 1916 and was published in book form by Okura Shoten in December of the same year. This novel is one of the few French full-length novels that were introduced as "shojo shosetsu (girls' novel)" in girls' magazines in the early Taisho period.

The novel is about Prascovie Lopouloff, a real-life young girl who traveled alone to St. Petersburg to appeal directly to the Czar for her father, who was falsely accused and exiled to Siberia as a political prisoner, and obtained a pardon for him. The study of the history of the reception of this novel about Prascovie Lopouloff in France and Japan revealed that although it is a forgotten work in modern Japan, it was quite popular in France in the 19th and early 20th centuries and was read as a world classic and biography for children in Japan from the 1960s to the 1970s. In Japan, Prascovie's anecdote was already introduced many times in the latter half of the Meiji period in books, women's magazines, and girls' magazines, and in the Taisho period, a complete translation of Maistre's novel was desired to introduce the tale to more girls, and Nomura's translation was born.

This paper introduces the interesting history of the reception of Prascovie's anecdote in France and Japan and also examines the aspects of the translation of "Siberia no shōjo," the first complete translation in Japan, translated by Sueko Nomura, and the image of the girl in it, as well as the educational considerations for young readers.